

地域に頼られる

たしかかな総合診療



組合立諏訪中央病院
吉澤 徹 院長



病院外観

組合立というのは珍しいが、前身となったのは昭和25年に開設した、ちの町国保直営諏訪中央病院。その後、ちの町をはじめとする10カ町村により構成される組合へ経営が移管され、町村合併により茅野市、諏訪市、原村の2市1村による組合立病院になった。

病院から東を仰ぐと、標高3,000m級の峰々が連なる雄大な八ヶ岳連峰が見えた。山の尾根には雲がかかっているが、病院の周囲は快晴で、じりじりと日差しが照り付けている。院内へ入ると一転、いたるところにさりげなく花が飾られ、少し涼やかな気持ちになった。病院の見どころであるというハーブガーデンを背景に、院長の吉澤徹先生と山岸紀子看護部長からお話を伺った。

産婦人科から内科へ

伊那出身の院長は、佐賀医科大学（合併し、現佐賀大学医学部）を卒業後、長野県へ戻り信州大学医学部附属病院に入

広い敷地のハーブガーデン

地域医療最前線 組合立 諏訪中央病院

○病院の概要（平成30年度実績）
病床数：360床
病床稼働率：89.6%
平均外来患者数：873.6人/日
紹介率：27.6%、逆紹介率：42.2%
救急車搬入患者数：2,777人
職員数：818人（令和元年6月30日現在）

長野県の中ほど、県下最大の湖である諏訪湖の東側に位置する茅野市。国宝指定の土偶をモチーフとした様々なメニューに彩られた茅野駅から車で10分ほどの場所に、今回の取材先「組合立諏訪中央病院」はある。

た諏訪中央病院を見学に訪れた。本から受けた印象通りの病院と、案内してくれた鎌田名誉院長の人柄に「この人の下で働きたい」と感じ、諏訪中央病院で内科医としてゼロから再スタートを切った。

病院ぐるみで育ててもらった

大学の産婦人科では教育する側に立っていた院長だが、内科の経験はない。当時は研修制度がまだ整っていないかつたため、自分から周囲の人に教えを請い、学んできたという。先輩医師から手取り足取り教わるのももちろんのこと、看護師からの知識なども貪欲に吸収した。特に急患室の看護師は非常に知識豊富で、救急医療の在り方やさまざまなことを教えてもらったという。

今では教育病院として、研修に力を入れている諏訪中央病院。「医師だけでなく、看護師をはじめとするメディカルスタッフにも育てられた」と語る院長が、スタッフ間の距離が近いこの病院を象徴するように見えた。

総合診療で多角的に診る

病院の正面玄関を入ると、すぐ左手に救急総合診療センターがある。廊下を進



救急総合診療センター
初診の外来患者は
ここへ案内される



待合時間に借りられる図書スペース

むと、夜間・休日出入口の奥に、救急外来・初診外来の文字。昼夜問わず、初診と救急の患者を一手に担う、病院の基幹部門だ。

専門医制度によって診療科が細分化されている今日

だが、患者さんが病院を訪れる際にどの診療科を受診すべきか判断するのはなかなか難しい。また、医療者側が先入観にとらわれてしまいう可能性もある。そこで諏訪中央病院では、平成14年に前身となる総合診療科



多角的な視点で診療する

を立ち上げ、紹介状のない初診患者は全て総合診療科を受診してもらうことにした。様々な症状や訴えを多角的に診断し、必要な治療を判断して院内・院外の専門医へと繋いでいる。救急総合診療センターには若い医師も多く所属している。ベテラン医師の下で多種多様な症例を診ることができると、総合医を育成する場として有効だ。また、人手の少ない他科の業務を補佐するなど、専門医だけでは担えない部分も補っている。

さんいれば良いが、現実には医師偏在、地域偏在が生じてしまう。良い医療のためには、まずは総合診療医が活躍し、専門的な治療が必要になったらすぐ専門医が助けてくれるという、相互の協力関係が非常に重要という考えだ。

職種の垣根が低い病院

続いてお話を伺ったのは山岸看護部長だ。院長と同じく南信の富士見町出身で、千葉の看護学校を卒業し、地元に戻ろうと考えて諏訪中央病院へ赴任した。当時は駅前であり、小さな病院だった。



組合立諏訪中央病院
山岸 紀子 看護部長

都会の大病院とは違い、職員が少な
く様々な職種がフレンドリーだと感じた
という。特に印象に残っているのが、当時
副院長だった鎌田名誉院長が始めた、今
でいう入浴介助だ。在宅で寝たきりの患
者さんを有志で共同浴場へ連れ出し、家
で介護している家族に休憩してもらおう
と始めたのだそう。診療とは全く関係
なく、ボランティアでお花見をしたり、
外食に出掛けたりと、多彩な「やりたい
こと」を企画し、みんなが自然と協力す
るような病院だったという。介護サービ
スが始まるよりずっと前の、家で介護を
するのが一般的だった時代に、こうした
前衛的な試みを楽しんで実施していたと
いうことに驚いた。

この頃の経験が、現在の多職種連携の
考えに強く影響を及ぼしているよう
だ。「昔はさまざまな職種の垣根が低
く、皆で協力して業務をこなしてい
たように思う。今は職種ごとに振り
分けられたが、各々が自分の業務を
ただ行うだけでは足りない。一人の
患者さんに対することなので、ちゃ
んと情報共有して助け合わないとい
けない」とチーム医療の重要性を強
調した上で「もともと職種間の垣根
が低いこの病院だから、導入しやす
かったと思う」とにっこり微笑んだ。

同期意識の芽生え

諏訪中央病院では、新入職員のオリ
エンテーションをはじめとして、様々な研
修を多職種混在で実施している。研修で
顔見知りになっておくことで、現場で気
軽に話したり、スムーズに協働すること
ができるという考えだ。研修ではワーク
シヨップやチームビルディングを行い、
グループで考え、共有する内容となっ
ている。なかには、患者経験者に参加し
てもらい、患者さんがどう感じているか
を知る研修や、自分の職種と異なる職種
を演じる模擬カンファレンスなどもある
という。多様な立場の視点から考えるこ
とを促す、地域密着の病院ならではの研
修だと感じた。



新入職員の
多職種同
オリエンテーション



研修によるチームビルディング

地域に開かれた病院

産婦人科の入り口には、「赤ちゃんに
やさしい病院（BFH）」の認定を証明
する、ピカソの絵画が飾られている。ま
た、院内を回っていると、職業体験に來
た中学生たちに会った。聞くと、病院に
いる様々な職種を知ってもらうため、積
極的に受け入れているという。看護部長
から「今日は何の仕事を勉強した？」と
聞かれ、理学療法士や助産師などの職
種が口々に返ってきた。当初は医師、看護
師しか知らなかったという彼ら。地域の
次世代を担う若者に知ってもらうこと
が、継続的な地域医療の基盤を作っ
ていると感じた。



BFHの認定病院は
県内では2箇所のみ



ボランティアの自作という作業小屋

病院の広い中庭には、色とりどりの花
が咲き乱れている。ハーブガーデンとし
て開放されているこの庭は、毎週水曜日
にグリーンボランティアによって手入
れされているそうだ。グリーンバザー
や病院祭などで活動資金を工面し、花の
種や道具なども自分たちで用意してい
るという。「活動日に、病院職員が一
緒にお昼を食べたり、ハーブティーを振
舞ってもらって、お礼に医師が楽器を演
奏することもあります。若手の医師など
が励ましてもらったりもしていますよ」と
院長が笑って話してくれた。庭にある
立派な作業小屋も、ボランティアが建
てたものだという。

他にも、動物病院の先生が組織してセ
ラピードッグを連れてくるアニマルボラ
ンティアや、待合で読む本を貸し出す図
書ボランティアなど、病院には多
くのボランティアが出入りしてい
る。病院は来るもの拒まずのスタ
ンスだが、自発的に研修をした
方々が来るため特に問題も起きた
ことはないという。地域に対して
開かれた、人の出入りの多い病院
のスタイルは、有志を募って入
浴介助を行う小さな病院だった頃



山岸看護部長の愛読書は
齋藤清一著「大事なものは見えにくい」



山岸看護部長の愛読書は
齋藤清一著「大事なものは見えにくい」

また、さまざまな職種の新人職員を集
めて、日々メンバーを変えながらグル
ープワークを続けたところ、ある変化が見
られるようになったという。「医師と看
護師など、職種を超えて同期という言葉
がよく聞かれるようになりました。それ
まであまり聞かなかったんですけど」と
いい、業務においても同期同士の連帯感
が生まれたようだ。研修も数か月ごと
こまめに行われるため、頻繁に顔を合
せたり、連絡を取り合っていて相談し
たり、お互いに支え合っていることが多
そうだ。

チームで連携することはとても大切だ
が、それだけでなく自分の職種の役割を
きちんと把握し、果たすことも大
切だ。「ただ業務を割り振るのでは
なく、その業務をお願いした分、
自分は何をすべきなのかを考える
ことが、うまく連携していくとい
うことだと思います」と多職種連
携の理想像を語った。

思いやりで 形作られた院内

院内を山岸看護部長に案内して
もらった。広々とした院内は、新
旧の建物が廊下で繋がれて、緩や



テラスの花もボランティアが
手入れしている



ラベンダーが並ぶカーペット敷きの廊下

かな時の流れを感じさせる。どこの病
棟でも、現場のスタッフと屈託なく会話
する看護部長が印象的だった。

病棟内の廊下はカーペット敷きになっ
ており、歩いても足音がしないよう
なっている。入院患者に静かな環境で過
ごしてほしいという配慮だ。また、患者
さんやご家族が棟内で迷ってしまわな
いよう、廊下の突き当たりの壁にはそれぞ
れ異なる花や折り紙を飾り、目印とな
るようにしている。北棟には花壇のあるテ
ラスとそこに面したラウンジがあり、多
種多様な花が咲いている。ボランティア
が入って、患者さんとパーベキューをす
ることもあるそうだ。

令和元年度 医療・福祉に必要な多職種連携研修会

地域包括ケアシステムの推進に必要な多職種連携のための実践
的なスキルとしてのチームビルディングを習得し、さらには多職
種への理解を深めることで業界・職域を超えた連携協働をもって
地域で活躍できる人材を育成するため開催します。

詳細は下記事務局までお問い合わせください。

日時：令和元年11月10日（日）10：30～15：30

会場：茅野市民館2階 アトリエ（茅野市塚原1丁目1番1号）

事務局：長野県国保地域医療推進協議会、長野県国保直診医師会

TEL：026-238-1553

諏訪中央病院の
医師も講師として
出席されます！

